

## 1 1月の書籍紹介

- ① 『東大塾 現代イスラーム講義』長沢栄治・後藤絵美編、東京大学出版会、2023年9月25日、東京大学出版会、ISBN978-4-13-033075-6，C1030, (4000円＋税)

本書は「グレーター東大塾 イスラームとどう付き合うか——グローバル化する社会と宗教の断層」(平成28[2016]年度秋季開講)における連続講義とその質疑応答を、加筆修正を施して、収録したものである。

現在の世界総人口のうち、その4分の1を占める約20億人がイスラーム教徒、ムスリムであると言われる。創唱者がアラブ人ムハンマドであるためにイスラームはアラブ人や中東地域に固有の宗教と思われがちであるが、成立当初から共存と融合を掲げた世界宗教である。イスラームは当時のアラビア半島に根づいていた頑迷な血縁主義や部族主義を打破して、人種、国籍、身分にかかわらず、あらゆる人間は全知全能の神の前では絶対的に平等であると主張した。また、基本的な教義を崩しさえしなければ、各地の伝統や文化を維持することが認められ、大幅な土着化が許容されたために、瞬く間に世界中に広まった。

現在、イスラームは、世界で第二位の宗教勢力であり、アフリカの大西洋岸から東南アジア、ヨーロッパ、中央アジア地域、中国の西北部まで分布している。インドネシアでは約2億の人口の90%がムスリムで、国内のムスリム数は世界最大となっている。アジアではほかにマレーシア、バングラデシュ、パキスタンなどがイスラーム教国である。

現在、イスラームは、世界中で16億人～20億人ともいわれる信徒を抱える、世界第二位の宗教勢力であり、アフリカの大西洋岸から東南アジア、ヨーロッパ、中央アジア地域、中国の西北部まで分布している。インドネシアは約2億の人口の90%がムスリム(イスラーム教徒)で、国内のムスリム数は世界最大となっている。アジアではほかにマレーシア、バングラデシュ、パキスタンなどがイスラーム教国である。インドにも人口の13%、約1億8000万人のムスリムが住んでいる。アラブ諸国、つまり北アフリカや中東の国々はほとんどがイスラーム教国である。最近ではヨーロッパに5000万人以上のムスリムが住んでおり、北アメリカでもユダヤ教徒の人口を抜く勢いで増加している。

いまやイスラーム世界は自然エネルギーを生産する国も多く、特に世界政治や経済的側面で大きな影響力を發揮している。それと同時に、世界各地でイスラーム復興を掲げて、戦闘的な行動を起こす集団が、1948年のイスラエル建国以降、各地で勃興するようになり、イスラーム社会にたいする世界の評価を下げる要因ともなっている。

本書はこのような多くの側面を見せながら展開する現代イスラーム世界の諸問題に対して、一方に偏るのではなく、学問的中立的な立場から、また様々な側面からの真摯な研究成果を分かりやすく丁寧に公開している。本書はそれぞれのテーマの専門家によって公開されているために、それぞれの専門家によって、アラビア語などの日本語表記が異なっている。編集者の長沢栄治と後藤絵美は、このような専門用語の表記の相違なども、イスラーム研究の幅広さを示すものとして、捕らえてほしいと言う。

世界の何事も、その評価は時代や時間と共に変化する。編者の長沢によると、本講座が実施されたころは「イスラーム国(IS)」の常軌を逸した蛮行や、多くの難民を出しながらいつまでも治まらないシリア内戦など、世界史的に見ても理解することのできないことが

続いていて、イスラームという宗教への世間からの風当たりが極めて強く、「人殺しの宗教」と非難されもした。一時期ではあるものの、研究者にとって、辛い時期でもあったが、研究者たちは、これまで積み重ねてきたイスラーム研究を中断する人は誰もなく、これを機に、ますます研究を深めた人ばかりであったように思われる。

また本書では扱われなかったが、1948年にパレスチナにイスラエルが建国されると、ユダヤ教徒とイスラーム教徒との対立が続くようになり、2023年10月から、イスラエルとパレスチナのガザを拠点とするハマースとの間に熾烈な戦争が勃発して、子供たちを中心としたガザ住民の中に多くの死傷者が出て、安否が危惧される事態となった。イスラームを取り巻く諸問題の中には、パレスチナ問題も含まれる。次回にはパレスチナ問題も取り上げてほしいと願うものである。

最期に、本書では元の講義に合わせて、Ⅰ「思想・歴史」、Ⅱ「政治・経済」、Ⅲ「文化・社会」に分かれている。読者は自分の関心のあるテーマから読み始めてもいいと思われる。特に第7講の「イスラームとジェンダー」と第8項の「変容する宗教文化」はぜひ読んでいただきたい。女性の立場をめぐる問題は、意外にも日本社会より、女性差別的と言われるイスラーム社会のほうが進んでいる場合もあることに気付かされる。

(紹介者：塩尻和子)

② 『宗教と科学のせめぎ合い 信と知の再構築』 水谷周著、国書刊行会、  
2023年9月5日、国書刊行会、ISBN978-4-336-07557-4 C0014 ¥3200E

本書は、最近、我が国におけるイスラーム布教に関して、日本ムスリム協会の理事などの要職に就き、布教の責任を負うようになった著者の、これまでの多くの著書とは、少し様相の変わった著作である。これまでの著書はイスラームについて、極めて丁寧な解説を行うものであり、その極みが、日本人が理解しやすい日本語で翻訳出版された『クルアーンやさしい和訳』（水谷周、監訳著、国書刊行会）にみられるように思われる。

本書はこれまでの著作とは異なって、京都大学文学部を卒業した著者らしく、「信と知」という分類を議論の焦点に置いて、思想としてのイスラームをキリスト教や仏教・神道などと対比させるというアイロニーの利いた手法をとったものである。そのためにそれぞれの高名な宗教家や哲学者の思想と著者の思想の対比においては、著者独自のユニークな判断や理解も見られる点には、深く検討された上での独自性があり、他の研究者にはあまり見られない理論を組み立てた興味深い立場も見えてくる。

そのような理論を、イスラームの新しい理論的展開とすることは、読書人には興味深い作業であろう。この点は、常に新しい思想的展開を好む人々には好評かもしれないが、あらたに「イスラームとは何か」を学ぼうとする初級の人々には、ある種の戸惑いを与えてしまうことになるかもしれない。イスラームをわかりやすく説明をするのではなく、ある意味では、分かりにくくさせる可能性も危惧される。

著者はさらに「あとがき」において、「本書の組み立てをもう一度確かめておこう」として、238頁から239頁にかけて、本書の意図として「信仰と科学」について、分かり

やすく纏めている。この纏めは本書の「はじめに」に置かれるとともに、「おわりに」にも再録された方が適切であったように思われる。

とはいうものの、「おわりに」の238頁に、著者は結論として洋の東西の「信仰と科学」について、「人の生を、素の生命観と人生観に立ち直して、自らを眺めなおす必要もあるかも知れない」として、「ストレートに素で生きることを目指してほしいのである」と結論めいた文章で締めくくっている。

この結論は人々の心に訴えるものがあり、読者は、各宗教や高名な研究者の難しい理論を学んだのちに、ストレートに素で生きることを目指してもいいのだと、安堵するかもしれない。本書はイスラームについての研究書としてだけでなく、賛否はあるとしても、他の宗教についても応用のできる宗教解説にもなっている。(紹介者：塩尻和子)